法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

この半世紀の琉球文学研究、そしてこれからの研究

波照間，永吉 / ハテルマ，エイキチ

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
42
(開始ページ / Start Page)
39
(終了ページ / End Page)
62
(発行年 / Year)
2015-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010696

Hosei University Repository

この半世紀の琉球文学研究、そしてこれからの研究

波照間　永吉

はじめに

戦後、特にこの半世紀の琉球文学研究の流れを跡付け、今後どのような方向に向かうべきかを考えてみたい。

まず最初に、ここでいう「琉球文学」とは、たとえば外間守善氏の用語では「沖縄文学」あるいは「南島文学」などと称されるものと同一と理解していただきたい。「琉球文学」という用語をここで用いるのは、まず第一にこの語で称される主な文学作品が琉球語によって形づくられているということ。第二に、この文学が作られ、享受されてきた地域が琉球語を母語とする「琉球文化圏」と称される、奄美・沖縄・宮古・八重山であること、そして、第三に、この地域は第二尚氏以降は琉球国として独立した国家を形成していたこと（奄美地域は一六〇九年以降は島津氏の支配下となる）などによるものである。「琉球文学」の呼称はすでに伊波普猷が使っており（恩師田島利三郎の著書に『琉球文学研究』〈一九二四〉と名づけて刊行しているし、自身の論文にも、例えば「日本文学の傍系としての琉球文学」〈一九二七年〉というように使っている）、戦前の小野重朗の著作『琉球文学』（一九四二）、戦後の宮良当壮『琉球文学選』（一九五八）、嘉味田宗栄の三部作『琉球文学序説』（一九六七）・『琉球文学発想論』（一九六九）・『琉球文学表現論』（一九七八）、そして池宮正治『琉球文学論』（一九七六）・『琉球文学の方法』（一九八七）など、広範に使

Hosei University Repository

われている。これら先学の「琉球文学」という呼称の採用の根拠については割愛せざるをえない。そのような中で、外間守善は、「琉球」の呼称が沖縄本来の自称ではなく中国からの命名であるとの立場から「沖縄文学」の呼称を採用し、[1] さらには島尾敏雄などの指摘を反映させて「南島文学」という呼称も使うようになった、と目されるのである。[2] しかし筆者は、上述の理由によって、「琉球文学」の呼称を用いている。

さて、この語で表される文学のジャンルがどうなっているかについて一瞥すると、広義の琉球文学には、琉球語によって形象された歌謡（『おもろさうし』・呪詞・呪謡・物語歌謡など）・琉歌・演劇・説話などの「狭義の琉球文学」と、近世以降盛んになる和文学、漢文学が含まれる。ここで和語による作品である和文学や、漢語による漢詩・漢文などで構成される漢文学をも琉球文学に含めるのは、先ず、これらの作品が琉球の人士によって作られたものであることがある。そして、これらの作品は近世琉球における人々の、明確な文学意識を背景にして作られたものであり、これらを除いて、近世期の琉球における文学意識の状況を把握することは出来ない、との観点からである。

全体として以上のような理解から、この半世紀の琉球文学研究を概観していこうとするのだが、これら全ての分野について触れることは到底できない。ここでは琉球語によって作られた「狭義の琉球文学」の内から、特に『おもろさうし』と琉球歌謡（南島歌謡）を取上げて、筆者なりのまとめと現在考えていることを書いてみたい。このジャンルを取上げるのは、『おもろさうし』研究が伊波普猷以来、琉球文学研究の中核をなしてきたということに鑑みれば、大方の了解は得られるものと思う。

1　『おもろさうし』研究

(1)　テキストの整備

Hosei University Repository

この半世紀のオモロ研究の中で特筆されることは、まずテキスト・辞典類の整備がなされたことがあげられる。戦前および昭和三〇年代までオモロ研究は、大正一四年に出た伊波普猷の『校訂おもろさうし』が重要なテキストであった。これは『おもろさうし』初の活字本で、戦前、そして戦後の一時期までのオモロ研究のテキストであった。『校訂おもろさうし』は基本的に田島本『おもろさうし』に拠ったもので、田島本と基本的に異なっているのは本文の体裁である。六〇〇部の刊行で、沖縄戦を挟んだこともあり、戦後のオモロ研究の一般化への道を開くにはなお及ばないものがあった。そんな中での仲原善忠・外間守善の『校本おもろさうし』（一九六五。以下『校本』と略称）の刊行は、戦後の『おもろさうし』研究の一大契機となったと言える。何故なら、本書は全国の研究者や学生が『おもろさうし』に対する興味関心を広く惹き起こすのに寄与すると同時に、テキストとして比較的容易に入手できる状況を作ったと考えられるからである。また『おもろさうし辞典・総索引』（一九六七。以下『辞典・総索引』と略称）は、例えば伊波普猷のような、琉球古語に対する深い造詣と知識を持った者のみが占有していたオモロ研究を、多くの人々に解放したといえる。特に索引はオモロを科学的に研究することを可能とした。また未詳語の解明にも大きな力を果たした。

その後、池宮正治の『おもろさうし諸本校異表』（一九七四）、『おもろさうし節名索引』（一九七六）など、テキストに密着した文献学的研究などを経て、外間守善・波照間永吉『定本おもろさうし』（二〇〇二）が出された。これは、尚家本『おもろさうし』を底本にし現在存在が確認される仲吉本・田島本・からの舎本などの写本と校合すると同時に、伊波校訂本・『校本』などの主要な活字本をも参照し、校異と注意事項を網羅した上で本文を確定したものである。ここにおいて『おもろさうし』のテキストの整理は一段落したと言えるだろう。

次に言語学的な研究でも大きな成果があった。高橋俊三『『おもろさうし』の国語学的研究』（一九九一）、『『おもろさうし』動詞の研究』（一九九一）である。これらの研究は『おもろさうし』の語彙を表記法の観点から厳密に調

Hosei University Repository

査し、オモロ時代の音韻を明らかにすると同時に、文法的な面まで解明した研究である。これによって『おもろさうし』の表記がオモロの時代当時の言語音をいかに厳密に表記しようとしたものであるか、そして、当時の琉球語の音韻が現在とは異なって、e音はまだi音へは変化しておらず、o音はu音への変化の途上にあった、ということまで学問的に推定することができるようになったのである。これはオモロ語の語義の確定および未詳語の解明など、オモロの語釈・注釈研究の精密化に大きな力となる重要な研究であった。その他には高橋の研究に触発された間宮厚の研究（『おもろさうしの言語』二〇〇五、『沖縄古語の深層―おもろ語の探究』二〇〇八、など）がある。

(2) オモロの解釈研究と解読法の研究

1) オモロの解釈研究の進展

オモロの解釈研究としてはまず仲原善忠の研究を挙げなければならないだろう。仲原のオモロ研究は戦前から始まっているが、伊波普猷亡き後、『おもろ新釈』（一九五七）を出している。これは伊波普猷の『おもろさうし選釈』（一九二四＝大正一三）の後を継ぎ、一九七〇年代のおもろ研究会（代表：仲宗根政善）の活動、一九八〇年代に入って大きく展開されるオモロの解釈研究の先鞭をつけた研究と位置づけられ、『おもろさうし』の注釈研究の代表作と言える。下に挙げる研究も含めたこれらの研究を総合したのが『校本おもろさうし』『おもろさうし辞典・総索引』であった。仲原善忠の琉球文学研究にはその他、「琉球の文学」（『岩波講座日本文学史16巻』一九五九、一月）、「琉球文学」（『日本文学研究必携古典編』一九五九、二月）、「沖縄の文学」（『琉球育英会報』一九五九、二月）などがある。仲原のこれらの研究は『仲原善忠全集』第二巻に収録されている。

仲原以後の解釈研究の面では、外間守善の岩波日本思想大系18『おもろさうし』（一九七二）がオモロ研究を飛躍的に拡大するのに貢献した。本書は、オモロ本文に漢字を当て、オモロ全首に頭注を付けていた。これによって多く

Hosei University Repository

の人に『おもろさうし』がどのようなものであるかを、表面的にではあれ、知らしめることになった。外間はその後、『おもろさうし―古典を読む 22巻』（一九八五）、『南島の神歌』（一九九四）でオモロを分かりやすく紹介し、『校注おもろさうし』（岩波文庫 二〇〇〇）で『おもろさうし』全訳を果たした。外間の前にも鳥越憲三郎の『おもろさうし全釈』（一九七二）があるが、オモロ研究の歴史を反映したものにはなっておらず、評価しがたい。

この外間の研究と並ぶものとして、仲宗根政善を中心にしたおもろ研究会の活動をあげることができよう。結成以来四〇数年の歴史をもつが、その前半の二〇年の活動は数々の成果を生んだ。先に触れた高橋俊三の研究もこの研究会の中から生まれた。おもろ研究会の成果は、例えば池宮正治編『おもろさうし精華抄』（一九八七）がある。池宮や嘉手苅千鶴子のオモロ研究（『オモロと琉歌の世界』（二〇〇三））の基盤になったのはこの研究会、といってよいだろう。池宮の『琉球文学論』（一九七六）、『沖縄文学論の方法』（一九八二）などは現在のオモロの解釈研究に影響を及ぼしている。

ほかにも『浦添市史 文献資料編』（一九八二年）の「浦添関係オモロ」（池宮正治）、『沖縄 久米島』（法政大学沖縄久米島編集委員会編。一九八三年）の「『おもろさうし』巻二一の解釈」（法政大学大学院外間守善ゼミ）などで、徹底した語例検証に支えられた語釈と、関連文献を博捜する方法が示された。これらは多くの市町村史のとりあげるそれぞれの地域のオモロの解釈にも同様に展開されており、現在のオモロ研究の水準がわかる。また、島村幸一『コレクション日本歌人選 おもろさうし』（二〇一二）は鑑賞講座的な位置づけながら、こまかな語釈と新しい知見をちりばめ、最近の研究の成果として評価される。

この研究の流れに位置する重要な研究があった。日本古代文学研究者の益田勝実などの成果に学びながら、琉球文学研究に新しい局面を拓こうとした比嘉実の研究である。比嘉の研究はオモロや琉歌を軸にしてなされたが、斬新な視点から展開された所論は柔軟であり、奥行きも広いものであった。オモロの解釈・読解法をめぐって小野重朗との

Hosei University Repository

間に展開された論争「おもろの読解法について――分離解読法の問題点」（一九七五）、「地方おもろ成立の周辺――地方おもろと文字の出会い」（一九七七）、「琉歌の源流とその成立」（一九七五）、そして「花風前史―視覚の呪術的意味の変遷―考」（一九八一）、「中国文化の琉球への伝播―おなり神と媽姐〈天妃〉を中心に―」（一九八二）、などは、その著書『古琉球の世界』（一九八二）にまとめられている。概括的に言うと、その研究は、一九七〇～八〇年代におこった新しい琉球文学研究の一つの成果、と言えるだろう。

氏の学問的関心はオモロや琉歌などの琉球文学のみにとどまらず、それを生み出す古琉球の想像力・思想の解明に向っていたとみられる。「文様にみる古琉球の思想―日輪双鳳雲文の成立を中心に―」（『沖縄久高島調査報告書』一九八五）はそのような氏の関心をもっともよく伝える優れた論考である。御自身の選択とはいえ、琉球文学研究の第一線から退かれたことは、なんといっても惜しまれることであった。

なお、オモロの解釈は学際的な知識が必要であることは言うを待たないが、現在の隣接科学の研究の現場からオモロと『おもろさうし』について論じることも必要である。その試みが拙編の『琉球の歴史と文化―『おもろさうし』の世界―』（二〇〇七）である。これには考古学から安里進、歴史学から高良倉吉・豊見山和行、民俗学から赤嶺政信、言語学から高橋俊三の各氏が関わっている。今後はこのような隣接諸学の研究の総合による一首一首の注釈・解釈の精密化が目指されねばならないだろう。

2）オモロ解読法の新展開

上記の研究と並んで特筆されるべきことは、オモロの読解の方法論的研究が進んだことである。玉城政美によって領導された歌形論的研究がそれである。これは研究史的には世礼國男の「反覆法」（「琉球音楽歌謡史論」一九四一年。『世礼國男全集』に収録）、小野重朗の「分離解読法」（「朝凪・夕凪のおもろ」一九七二年。『南島の古歌謡』に

Hosei University Repository

収録）などと発想を一つにするものといえる。世礼の研究には、『おもろさうし』の記載法の問題、そして「反復」の問題が早くも取り扱われていた。この点において、世礼論文は問題の所在を的確に把握していたと言える。しかし、この二つの論点いずれにおいても、分類と整理に包括性と厳密性に問題があった。それは、南島歌謡の全体像がまだ未解明であったという時代状況が影響する部分もあったものと思われる。また、小野の「分離解読法」は、オモロの本文が「連続部（対句部、叙事部）と繰返部（囃子詞部、抒情部）の重なり合ったものである」こと、したがって、解読の際には「この二つをはっきり分けてしまって、別々に解読する」というものである。ここにおいてオモロの構造が「反復」という概念で整理されることが、大方の認めるところとなったと言ってよいだろう。しかし、小野重朗の見解には本質的な問題があった。それは対句部と反復部の境界をどこに設定するかという極めて根本的な部分について、「連続部」と「反復部」の判別は「普通さほど難しくない。おもろの第一節（「一」の記号に続いていて、「又」の前までの部分）の前部は連続部で後部は繰返部であること。繰返部は第二節（最初の「又」から次の「又」まで）以下では普通は省かれていて連続部だけになっているので、この点で判別すればよい」[3]という、楽観的な見解しか示さないことであった。

これらの先行研究に対して、玉城政美はまず『おもろさうし』の記載法を「完全記載」「部分記載」「省略記載」に整理・分類することから始めた。そして、次に南島歌謡全体を通底する表現法、すなわち、対語・対句を重ねて事柄を叙事的に展開する叙述方法を「対句法」として、これを構成する「対句の型」には八種類があることを明らかにした。そしてその対句の型が単独ないしは複数組み合わさって一つの歌詞を構成するものであることを明らかにした。そして、オモロについては記載法と対句法を組み合わせることによって、一首のオモロの構造が明確となる、と論じた。さらに玉城は、歌唱法についても分類を試み、南島歌謡の基本的歌唱として独唱法・復唱法・分担歌唱法・交互歌唱法があることを指摘した（「南島歌謡の歌唱法〈試論〉」一九八七）。この歌形論的研究の功績は大きく言って二

Hosei University Repository

つある。その一つは、オモロも含めた南島歌謡研究が客観的な要素の分析と総合によってなされるべきであることを示したことであり、いま一つは、オモロを他の南島歌謡と同列において論じることを可能にし、オモロの南島歌謡としての普遍性と特殊性を論じることが出来るようにしたことである。

また、歌形論的研究によってオモロの本文を復元するという方向でも研究が進んでいる。これについては筆者の研究（「『おもろさうし』の記載法」他、『南島祭祀歌謡の研究』一九九九参照）などで、『おもろさうし』の記載法の基本は、同一詞句の記載の省略にあり、その記載の省略は反復部のみでなく、対句部にも及んでいることが明らかにされてきている。

また、オモロを解釈するためには、オモロをその現場にもどして考えること、すなわち、当該のオモロが何時・何処で・誰が・何を・何のために・どのようにして歌われたのか（オモロの5W1H）を明らかにすることが前提とされるべきであることの主張にもつながって行っている。これは民俗研究と民族音楽学を含む歌謡研究のありかたを示すものであるが、ごく当たり前のことではある。しかし、これまでのオモロ・歌謡研究にはその当然といえる視点が欠けていたのであり、より客観的であろうとする立場から構築された新しい視点と言える。

2　琉球歌謡の研究

(1) テキストの整備

上記のようなオモロ研究に牽引される形で他の歌謡研究も展開されてきた。そもそも、これらの歌謡をどのような名称で呼ぶかが問題ではある。仮に、奄美の歌謡については「奄美歌謡」、宮古のそれについては「宮古歌謡」というように、それぞれの地名を冠して呼ぶことは簡便ではある。そして、後述するように、各地域の歌謡はそのように

Hosei University Repository

呼ばれ、書名ともなり、術語的に使われても来ている。しかし、これら琉球文化圏の歌謡を総称する時、どのような呼称がより適切であろうか。この問題については先に外間守善の「南島文学」という呼称について触れたところで、島尾敏雄の考えもあって「南島」という語が採用されたことを紹介した。琉球文学研究史上特筆される『南島歌謡大成』という書名はこうして登場した。しかし、この「南島」についてもなお議論がある。すなわち、「南島」は『続日本紀』以来、大和（日本）の王権・政権による呼称であり、この地域の自称ではない、という論である。十分に納得できる考えである。しからば「琉球」か、「沖縄」か、ということになって、議論は堂々巡りとなりそうである。

『南島歌謡大成』というテキストの存在、小野重朗『南島歌謡』（一九七二）、玉城政美『南島歌謡論』（一九八七）、狩俣恵一『南島歌謡の研究』（一九九九）、さらには、筆者自身が拙著の書名に「南島祭祀歌謡」という術語を用いるなど、「南島歌謡」という語は人口に膾炙した感がある。しかし、あえてこれをあらためて議論することは「琉球文学」の存在とも関わることで、重要な問題ではなかろうか。「琉球文学」との整合性から「琉球歌謡」という呼称を選択することができるだろうか。因みに玉城政美のその遺著は『琉球歌謡論』と題されていた。[4] 本稿では、その問題の所在のみを指摘し、仮に「琉球歌謡」という呼称を使うことにする。

さて、戦後の歌謡研究としては稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』（一九六二）、喜舎場永珣『八重山民謡誌』（一九六四）、『八重山古謡』（一九七二）、外間守善・新里幸昭『宮古島の神歌』（一九七二）、外間守善編『南島古謡』（一九七二）が出て、歌謡研究の機運が大きく高まってきた。稲村の研究は、十八世紀に成立した、いわゆる「宮古島旧記」に記録された歌謡を翻刻し、その歴史的背景や歌謡語について解説を加えたもので、長く宮古歌謡研究の代表的位置を占め、外間・新里の宮古歌謡研究にも貢献するところの大きい著作であった。また、八重山の喜舎場の業績は、古い文献などに記録されることのなかった八重山の民衆の歌謡を記録し、民俗学的な徹底したフィールドワークによって得られた知見と文献渉猟によって細かに解説するという、すぐれたものであった。特に『八重山古謡』は

Hosei University Repository

その成果を高く評価され、その年の「柳田國男賞」を受賞した。これらの喜舎場の研究もまた、その後の八重山歌謡研究の根底を支える重要なものであった。こんななか、外間守善の編集で『南島古謡』が刊行され、日本本土の古代文学研究者らが琉球歌謡を視野にとりこむことがなされるようになっていった。これをさらに拡大・充実したのが『南島歌謡大成』（全五巻。一九七八～一九八〇年）である。この書によって奄美から八重山までの琉球文化圏に伝承されてきた歌謡、および琉歌の全体像が明確に示されたのである。この仕事はまた、日本古典文学者の琉球文学に対する学問的興味と関心を呼び起こすことにもなった。琉球文学研究史上、特筆されるべきことであろう。

その後、『日本民謡大観（奄美・沖縄）』（全四巻。一九八九～一九九三。収録曲数一、四九四）が編集された。この書は歌謡としての音楽面を五線譜で記載し、歌詞を演唱に合わせるとともに歌形論的に整理し、音声の表記にも注意して作成された。また、逐語訳を施して将来の言語研究の資料ともなるようにした。この資料によって、例えば、琉球歌謡の伝播や歌謡の消長までも追求できるだろう。歌謡という面からみると、その前に『沖縄音楽総覧』（一九六五）がLPレコード一九枚で出されている。こちらにも数百曲の歌謡が収録されているが、歌詞の記載に難点があり、文学研究のテキストとしての性格は弱い。これにたいし、沖縄県文化振興会が二〇一二年刊行した『沖縄の古謡』（CD全一九枚。収録曲数三四二）は、上記の『民謡大観』と同様に、歌詞の記載と歌唱がきっちりと対応していると共に、歌形論研究の成果も取り込んでいる。音源が付いており、例えば、歌唱法の研究についても資料が整っており、今後の歌謡研究に資することが期待される。

(2) 歌謡ジャンル論と新しい研究の展開

1) ジャンル論

さて、外間は上記のテキスト集成の前に「琉球文学の展望」（一九六五年。後に「沖縄文学の展望」に改稿・改

Hosei University Repository

題)、「沖縄文学の伝統と形態」(一九七〇)を書いているが、後者で狭義の琉球文学のジャンルを「呪祷」「叙事」「抒情」「劇」という四つに分類する考えを提起している。このジャンル論は後の『南島歌謡大成』編集の理論的バックボーンとなり、外間の代表的著作『南島文学論』(一九九〇)にまで受け継がれていった。外間はこのジャンル論について、沖縄文学(琉球文学)が世界の普遍的な文学ジャンルである「叙事」「抒情」「劇」の三大ジャンルを備え持つものであること。そして、文学の発生と密接する「呪祷文学」を有する点に特徴的な価値があることを説いている。この外間の仮説は、呪祷から叙事へ、そして叙事から抒情へ、という作品・ジャンルの文学史的展開を想定するものであるが、これは折口信夫の「国文学の発生」論を踏襲・実証する、というモチーフによったものであった。

この外間のジャンル論については、異論もまたある。外間の呪祷⇓叙事⇓抒情という文学史的な展開について、「ジャンルがジャンルを生むか」という議論に代表されるように、様々な形で議論がなされているのが現状である。しかし、この外間の仮説は、例えば池宮正治氏の「古謡」「物語歌謡」「短詞型抒情歌謡」という整理(『琉球文学論』一九七七)や、玉城政美の「儀礼歌謡」「物語歌謡」「抒情歌謡」という整理(『琉球歌謡論』二〇一〇)などにみられるように、なお基本的な部分では受け継がれていると言えるかも知れない。

ジャンル論としては、歌謡の〝場〟による分類も可能である。これについては『日本民謡大観(奄美・沖縄)』の目次構成のバックボーンとなった「儀礼・行事・祝い」(神事に関わる歌・共同体行事歌・家行事歌)、「仕事・作業」(作業歌)、「座興・遊び」(座興歌・遊び歌)という分類がある。また、小生の「祭祀歌謡」「儀礼歌謡」「労作歌謡」「遊戯・雑歌謡」という考え方もある。さらに言うと、詞章の形式(長短)による分類も可能である。この場合は長詞型歌謡か短詞型歌謡かという、形式(長短)だけが問題となる。これに定型音数律の問題を加味すると、短詞型歌謡は琉歌のような音数律の整ったものと、宮古のトーガニや、八重山のトゥバラーマのような音数律未定のものとがあることなどをいうことができる。結局、ジャンル論の要諦は、その包括性にあると思われるが、それを議論するの

Hosei University Repository

は今後の課題である。

最後に蛇足であるが、例えば、池宮氏の「古謡」「物語歌謡」「短詞型抒情歌謡」という分類の用語について考えてみよう。「古謡」は新・古という時間を問題にした語であり、「物語歌謡」はその内容による語、そして「短詞型抒情歌謡」は、詞章の長短と内容に関わる語である。つまり、ジャンルを示す語が、あるものは時間、あるものは形式、あるものは内容による語になっているのである。その意味で、術語（ターム）の設定に一定の基準の欠けるうらみがある。池宮氏がこれらの術語について概念規定をした上で用いていることは言うまでも無い。このような些細なことも含めて、琉球歌謡のジャンル論についてはなお議論を深めていかなくてはならないことが沢山あるのである。

2）歌形論の登場

オモロでも展開されることになる歌形論は、当初、宮古・八重山の歌謡を対象として研究が始まった。小野重朗は、戦前に刊行した『琉球文学』ですでに琉球歌謡の形式について一定の成果を世に問うていた。その後の資料の公刊などを受けて研究を進展させたのが「南島古歌謡の歌形の系譜」（一九七四）で、これは戦後における琉球歌謡の形式について正面から論じた研究の嚆矢と言える。この論文で小野は琉球歌謡の歌形と音数律を同時に明らかにしようとした。しかし、小野の考えには次のような難点があった。それは小野の「歌形」と音数律の抽出は、その前提となる部分、すなわち琉球歌謡の表現形式として最も重要な「対句形式」についての分析が徹底せず、結果、「対句の型」の抽出が不完全にならざるを得なかった、ということである。そのために整理・統合されるべきもの（ヴァリエーション）が、小野においては個々の形式として分立され、そのため、音数律による「歌形」も分類が複雑化・混乱していっているのである。つまりは、音数律の問題と「対句の型」を区別して捉え、それによって音数律の分類・規定を行うべきであったのが、一緒くたにされることで、複雑・混乱化し、分類としても不完全のものになったので

Hosei University Repository

ある。

このような難点を克服したのが玉城政美の『南島歌謡論』にまとめられる歌形論研究であり、筆者の「八重山歌謡の歌形の諸相」（一九八二）である。なお、琉球歌謡の音数律についての研究は、拙稿「南島歌謡の音数律」（二〇一〇）で、上記の小野論文に対する指摘に基づいて一つの見解を示したが、全体としては未開拓の領域と言える。

3）歌形論研究の広がり

これらの歌形論研究と並んで、歌謡採集と記録の方法論的な試行もなされてきた。その初の試みは玉城政美・大城學・筆者らによってなされた「沖縄の神歌調査」である。この調査では、調査項目を「歌詞」「歌唱に伴う儀礼的所作」「歌形」「歌唱法」に設定し、歌謡の場と歌唱主体も含めて記録することとした。その成果は沖縄県教育庁文化課『沖縄の神歌』（全五冊）（一九八八～一九九二）にまとめられている。この方法は上記の沖縄県文化振興会『沖縄の古謡』にも踏襲されている。なお、玉城政美に触発された拙著『南島祭祀歌謡の研究』（一九九九）、玉城の指導を受けた上原孝三の宮古西原のユークイ祭祀を中心とした祭祀・儀礼歌謡の研究もその成果の一つである。

また、歌形論的研究とは別であるが、新里幸昭『宮古島の歌謡』（二〇〇三）、『宮古歌謡の研究』（二〇〇五）、狩俣恵一『南島歌謡の研究』、名護市史編集室編『やんばるの神歌』（一九九六）などの研究書が出ていることについてもふれておきたい。

この歌形論研究の視点から、祭祀歌謡の研究とその〝場〟の研究をリンクさせる必要性が認識されるようになってきた。民俗学領域の研究との連携があらためて注目されるようになったのである。祭祀研究は本来、民俗学の領域のものであろうが、琉球歌謡研究にとっては、その〝場〟、つまりは、祭祀歌謡の5W1Hを明らかにするには不可欠で

Hosei University Repository

ある。御嶽を中心として展開される一つの祭祀において歌謡がどのように機能しているかを見極めることは、民俗学的にも重要な関心事であろうが、歌謡テキストを研究する立場においても同じである。これをより客観化した観点から明らかにしようというのが、祭祀歌謡の5W1Hの考えである。これは、そのままオモロ研究にも適用される、即ち、琉球文化圏における祭祀研究の成果は、オモロの解釈研究に援用されるものであることは言うまでも無い。

この分野の研究としては祭祀空間についても明らかにされねばならない。これについては伊従勉『琉球祭祀空間の研究』（二〇〇六）を最大の成果としてあげることができるだろう。伊従の研究は、首里王府の主要祭祀場であった首里グスクから地方の御嶽・火の神などの聖域にもおよぶもので、その精緻な研究成果は琉球における祭祀歌謡研究を裨益するものであることは間違いない。この他の研究としては『琉球国由来記』記載の宮古・八重山の御嶽を現地調査してまとめた玉城政美・大城學・筆者らの『御嶽』（一九八七）がある。また、拙著『南島祭祀歌謡の研究』はこのような観点からの記述を心がけたものである。これら祭祀・儀礼現場の調査研究は今後も丹念に現地調査の求められる分野と言える。

4）歌謡構造論（あるいは歌謡形態論）と注釈研究

琉球歌謡の長詞型歌謡は叙事的な要素をもっている。この叙事性に着目し、歌謡の物語構造を明らかにする研究が必要である。これについては説話の形態学的研究などの成果に学び、琉球歌謡に固有の形態・構造を明らかにする研究がある。この領域の研究は現在、玉城政美の残した研究のみである。玉城は『琉球歌謡論』で「物語歌謡におけるヴァリアンテの生成」「物語歌謡における類歌の構造分析について」「トゥバラーマ〈恋歌〉の分類」「トーガニ〈恋歌〉の分類」「トゥバラーマ〈雑歌〉の構造と主題」「トーガニ〈雑歌〉の構造と主題」などで新しい研究の方向を示している。前二者は長詞型歌謡の物語歌謡の構造ついてのもので、後の三者は短詞型の抒情歌謡についての研究であ

Hosei University Repository

る。玉城はまさに独創的な研究に着手していたわけで、この研究分野の進展という面からも、その早世が惜しまれる。今後の琉球歌謡研究が取り組むべき大きなテーマの一つであり、注意を喚起しておきたい。[5]

それと同時に急がれなければならないのは、例えば『南島歌謡大成』に収録された歌謡テキストの整理と、その注釈研究である。この部分については幾つかの研究が公にされているが、なお立ち遅れている。新里幸昭の『宮古の歌謡　付宮古歌謡語辞典』（二〇〇三）、『宮古歌謡の研究』（二〇〇五）、当山善堂『精選八重山古典民謡集』（全四巻。既刊分は三巻）などがある。この間の研究成果として紹介しておく。この点においても玉城政美は先駆的な取り組みをはたしていた。その構想は「宮古歌謡語辞典」「八重山歌謡語辞典」として『沖縄古語大辞典』に収録されなかった琉球歌謡に出る言葉を、索引に基づいて用例を検討して語義を付与していくという本格的なものであったようである。[6] 玉城亡き後、一日も早い完成が待たれる。この分野については西表宏・大城學・筆者らも高橋俊三の指導を得ながら「喜舎場永珣『八重山古謡』索引」の作成を目指した。一九七二年以来の仕事であるが、約千枚の原稿にまとめたところで未完成のままとなっていることは、高橋・玉城の両先学の学恩を思うと、慙愧の念に耐えない。これを完成し、「琉球歌謡語辞典」の構想とともに、琉球歌謡の精確な注釈を行っていくことは、琉球諸語を母語とする世代の責務の一つであろう。

(3) 日本文学研究者による南島歌謡研究

最後に、歌謡研究の領域で特記されることが一つある。それは一九七二年の復帰を前後して、日本古代文学、特に文学発生論に関わる形で南島歌謡を対象とする研究が出てきたことである。その代表的なものが藤井貞和『古日本文学発生論』（一九七八。一九九二年、増補新装版）、『「おもいまつがね」は歌う歌か』（一九九〇）、『甦る詩学―「古日本文学発生論」続　南島集成』（二〇〇七）、古橋信孝『古代和歌の発生』（一九八八）、『幻想の古代―琉球文学と

Hosei University Repository

古代文学』（一九八九）、谷川健一『南島文学発生論』（一九九一）などが主要な成果である。これらの研究は小野重朗の「生産叙事歌謡論」や山下欣一の説話研究・シャーマニズム研究の成果を取り入れ、日本古代文学研究に大きな影響を与えると同時に、南島歌謡研究にも一つの視点を提供した。

これらのうち、最新の成果である藤井の『甦る詩学―「古日本文学発生論」続　南島集成』について言及しておきたい。本書は「第一部　南島作品」「第二部　南島論考」「第三部　南島語り」「第四部　南島書漁」「第五部　南島座談」からなっている。本書の中心は第二部の「南島論考」と第三部の「南島語り」にある（九二頁～六四八頁）。第二部（九二頁～四二九頁）にまとめられた論文は一九篇。いずれも、日本文学では早くに失われた（ノロ・ユタなどの神に仕える存在の管理する）呪詞・呪謡の世界を「南島文学」で確認し、柳田の神話論・口承文芸論、折口の叙事詩論を参照しながら、南島の祭祀と文芸を考察の材料とすることによって新しい神話論・古代歌謡論・和歌論・物語論を展開している。これはまた「南島文学」の特質と価値を論じることでもあり、同時に、新しい日本文学史の構想の必要性を説くことにもつながるものであった。

これを藤井氏は「文学史の複数化の構想」と称し、「ヤマトの古代、オキナワの古代、そしてカムイ・ユカラを産み出した古代という視野」（二六八頁）で文学史を構築することを説く。それは「日本文学史のために南西諸島を『利用』するのであってはなんにもならない、それどころか、けっしてそうあるべきでない」（二六八頁）、「『南島歌謡大成』全五巻の完結により、その雄大な全景をあらわした南西諸島の伝承歌謡のかずかずが、日本文学史の古代を豊かにする底力を秘めていることはまちがいない。その場合の日本文学史とは、本土古代を中心に考えるのとちがって、広く日本語やこの列島の総体的な規模において考えての、複数の古代を対等に出会わせるようにした、かなり新しい意味合いにおける文学史としてだ」（二六九頁）と語られる。氏の立場と今後の方向性が示されたことばである。この氏の立場と構想は筆者（波照間）の考えるところと重なる部分のあるものであると考えている（後出の拙稿参

Hosei University Repository

照)。

本書は、日本古代文学研究の立場から「南島文学」の特性とその有する価値とをあらためて説くとともに、『古日本文学発生論』で提示した理論的枠組みを精緻にして、優れている。さらには、新しい文学史の構想を提案するなど、今後の日本古代文学研究の枠組みの転換、「南島文学」研究の方向性をも示唆して刺激的である。これら日本文学研究の成果に学ぶことは琉球文学研究にとっても必要なことであろう。

また、上記の山下欣一の奄美を中心とするユタ(シャーマニズム)研究および琉球全域に及ぶ説話研究も、琉球歌謡研究には大切なものである。これについてはあらためて論じる必要がある。今後を期したい。

3 琉球文学研究——今後の課題

琉球文学をどう位置づけるかは重要な問題である。かつて伊波普猷は「日本文学の傍系としての琉球文学」と位置づけた。また、外間守善は、言語学の成果を援用する形で、日本文学と「沖縄文学」を共通の祖から分岐したものと位置づけた。すなわち、原日本文学を祖形として想定し、これから日本文学と「沖縄文学」が分岐したというのである。[7] 伊波と外間の所説には通底するものがある。即ち、日本文学と琉球文学の根を一つとみる見方である。

このような考えは、最近の研究成果の中にもみられる。例えば島村幸一は『『おもろさうし』と琉球文学』(二〇一〇)で、「日本文学のなかに定位する模索の道(中略)。もうひとつの日本語による琉球文学の日本文学への定位」と述べている。琉球文学をなお日本文学の中に位置づける考えである。

これについて筆者は、琉球文学を琉球語による独自の文学としての立場を明確にし、その実体を総合的に提示し、その個性と価値を把握するような、理論的研究が必要であると考えている。その試みとして筆者は「琉球文学にみる

Hosei University Repository

沖縄人の心性―琉球文学の固有性をめぐって―」（二〇一〇）という小論を書いた。その中で「全体的には文字の文化が一般化しなかった琉球社会の文学は、一部の和文や漢文作品を除いては、必然として物語・小説などの散文作品を持ちえませんでした。この状況によって、琉球文学の全体を不完全なものとしてとらえるのではなく、むしろ、そのあるがままの姿――呪詞・呪文などの『呪祷文学』や史歌・物語歌謡などの韻文文学の隆盛こそを琉球文学の個性として把握すべきと思うのです」と書いた。これは、「岩波日本文学史講座」が琉球文学を特立し、その第十五巻として『琉球文学、沖縄の文学』（一九九一）としていることなどとも軌を一にする。琉球文学をそれ独自のものとして、その総体と価値を明らかにする方向性こそが求められていると思う。

筆者はその研究の初発において「『沖縄自立の思想』のためには沖縄の歴史・文化を、他の何もののためでもなく、沖縄そのもののために知り、体系化するべきであると思った」（拙著『南島祭祀歌謡の研究』）。この思いは今も変わらない。琉球文学はこの沖縄の先人たちの思想と感受性の所産である。琉球文学研究はその作品に結晶した琉球弧の人々の思想と心性を明らかにするものでありたいと思う。

そして、最後に学校教育における琉球文学の取り扱いの問題を提起したい。これまでに筆者自身も、この問題を重要視してテキストの編纂に取り組んできた。[8] しかし、テキストはできても学校現場での活用がなお活発でないという現状がある。これをどうすれば克服できるか。これは研究者にとっても問題である。中学・高校の教育現場の先生方の力量の問題が絡んでいるからである。大学における琉球文学の教育が改めて問われていると思う。一筋縄ではいかないが、琉球語の教育・再生と並んで、しっかりと取り組まなければならないと思う。

（二〇一二・八・一〇）

【注】

（1）外間守善は一九六五年に発表した論文「琉球文学の展望」（『文学』第三三巻七号）を、一九七一年、「沖縄文学の展望」（『沖

Hosei University Repository

縄文化論叢』平凡社）と改題・改稿している。

（2）島尾敏雄『ヤポネシア序説』（一九七九年）など参照。外間守善と島尾敏雄は『南島歌謡大成』刊行を記念する座談会で「南島」呼称をめぐって意見を交換している（『国語科通信』一九七七年）。

（3）小野重朗「南島古歌謡の歌形の系譜」『沖縄文化』四一号・四二号（沖縄文化協会）参照。

（4）玉城政美『琉球歌謡論』（二〇一〇）は、遺稿を弟子ら関係者がまとめたものであるが、玉城自身の「構想メモ」に「琉球歌謡論・目次」と明記されている。同書五三七頁参照。

（5）これについては「座談会　玉城政美さんの琉球文学研究」（仲程昌徳・朝比奈時子・上原孝三・前城淳子。司会は筆者）（『沖縄文化』一〇九号　二〇一〇年　沖縄文化協会）参照。

（6）前掲注（5）に同じ。

（7）外間守善『南島文学論』（一九九五年　角川書店）九頁参照。

（8）高教組教育資料センター編・波照間永吉監修『新編　沖縄の文学』二〇〇三年　沖縄時事出版。二〇〇八年に増補・改訂版発行。

【参考文献】

池宮正治『おもろさうし諸本校異表』一九七四　謄写版。一九七九年、南西印刷出版部（ひるぎ　社）より刊行。

池宮正治『おもろさうし節名索引』一九七六　謄写版。一九八〇年、南西印刷出版部（ひるぎ社）より刊行。

池宮正治『琉球文学論』一九七六年　沖縄タイムス社

池宮正治『琉球文学論の方法』一九八二年　三一書房

池宮正治『琉球古語辞典混効験集の研究』一九九五年　第一書房

Hosei University Repository

稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』一九六二年　自家版。後に一九七二年、三一書房より再刊。
伊波普猷『校訂おもろさうし』一九二四年　南島談話会
伊波普猷『おもろさうし選釈』一九二四年　青山書店。『伊波普猷全集』第五巻（一九七二年　平凡社）に収録。
伊波普猷「日本文学の傍系としての琉球文学」一九二七年。『伊波普猷全集』第九巻（一九七五年　平凡社）に収録。
伊従勉『琉球祭祀空間の研究』二〇〇六年　中央公論社
浦添市氏編集委員会編『浦添市史　文献資料編』一九八二年　浦添市教育委員会
沖縄県教育庁文化課編『沖縄の神歌』（全五冊）一九八八～一九九二年　沖縄県教育委員会
沖縄古語辞典編集委員会『沖縄古語大辞典』一九九五年　角川書店
沖縄古謡保存記録専門委員会編『沖縄の古謡』二〇一二年　沖縄県文化振興会
小野重朗『琉球文学』一九四二年　弘文堂書房
小野重朗『南島歌謡』一九七二年　日本放送出版協会
小野重朗『南島の古歌謡』一九七五年　ジャパンパブリッシャーズ
小川学夫『奄美民謡誌』一九七九年　法政大学出版会
小川学夫『奄美の島唄―その世界と系譜―』一九八一年　根元書房
おもろ研究会著・池宮正治編『おもろさうし精華抄』一九八七年　ひるぎ社
嘉手苅千鶴子『オモロと琉歌の世界』二〇〇三年　森話社
嘉味田宗栄『琉球文学序説』一九六七年　沖縄教育図書
嘉味田宗栄『琉球文学発想論』一九六九年　糸洲安剛
嘉味田宗栄『琉球文学表現論』一九七八年　沖縄タイムス社

Hosei University Repository

狩俣恵一『南島歌謡の研究』一九九九年　瑞木書房
喜舎場永珣『八重山民謡誌』一九六四年　沖縄タイムス社
喜舎場永珣『八重山古謡』一九七二年　沖縄タイムス社
島村幸一『『おもろさうし』と琉球文学』二〇一〇年　笠間書院
島村幸一『コレクション日本歌人選56『おもろさうし』二〇一二年　笠間書院
新里幸昭『宮古の歌謡　付宮古歌謡語辞典』二〇〇三年　ムゲン社
新里幸昭『宮古歌謡の研究』二〇〇五年　自家版
世礼國男『世礼國男全集』一九八〇年　全集刊行委員会
高橋俊三『『おもろさうし』の国語学的研究』一九九一　武蔵野書店
高橋俊三『『おもろさうし』動詞の研究』一九九一　武蔵野書店
田島利三郎『琉球文学研究』一九二四年　青山書店。後に一九八八年、山下重一の「解題」、田島の三論考を加えて第一書房より再刊。
谷川健一『南島文学発生論』一九九一年　思潮社
玉城政美『南島歌謡論』一九九一年　砂子屋書房
玉城政美『琉球歌謡論』二〇一〇　砂子屋書房
当山善堂『精選八重山古典民謡集』（全四巻。既刊分は三巻）第一巻は二〇〇八年、第二巻は二〇〇九年、第三巻は二〇一一年でいずれも発行は有限会社ティガネシア。
鳥越憲三郎『おもろさうし全釈』一九六八年　清文堂出版株式会社
仲原善忠『おもろ新釈』一九五七年　琉球文教図書。『仲原善忠全集』第二巻（一九七八年　沖縄タイムス社）に収録。

Hosei University Repository

仲原善忠・外間守善『校本おもろさうし』一九六五年　角川書店
仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引』一九六七年　角川書店
名護市史編集室編『やんばるの神歌』一九九六年　名護市役所
日本放送協会編『日本民謡大観（奄美・沖縄）』全四巻。一九八九～一九九三年　日本放送出版協会
波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』一九九九年　砂子屋書房
波照間永吉「南島歌謡の音数律」『七五調のアジア』二〇一〇年　凱風社
波照間永吉「八重山歌謡の歌形の諸相」『沖縄文化研究』九号　一九八二年　法政大学沖縄文化研究所
波照間永吉「琉球文学にみる沖縄人の心性―琉球文学の固有性をめぐって―」『沖縄芸術の科学』第二二号　二〇一〇年　沖縄県立芸術大学附属研究所
波照間永吉編『琉球の歴史と文化―おもろさうしの世界』二〇〇七年　角川書店
比嘉実『古琉球の世界』一九八二年　三一書房
比嘉実「文様にみる古琉球の思想―日輪双鳳雲文の成立を中心に―」『沖縄久高島調査報告書』一九八五年、法政大学沖縄文化研究所
藤井貞和『古日本文学発生論』一九七八年　増補新装版一九九二年　思潮社
藤井貞和『「おもいまつがね」は歌う歌か』一九九〇年　新典社
藤井貞和『甦る詩学―「古日本文学発生論」続　南島集成』二〇〇七年　まろうど社
古橋信孝『古代和歌の発生』一九八八年　東京大学出版会
古橋信孝『幻想の古代―琉球文学と古代文学』一九八九年　新典社
外間守善『岩波日本思想大系18　おもろさうし』一九七二年　岩波書店

Hosei University Repository

外間守善『古典を読む　おもろさうし』一九八五年　岩波書店
外間守善『南島文学論』一九九〇年　角川書店
外間守善『南島の神歌』一九九四年　中央公論社
外間守善『校注おもろさうし』（岩波文庫）二〇〇〇年　岩波書店
外間守善編『日本庶民生活史料集成　第四巻　南島古謡』一九七二年　三一書房
外間守善総編集『南島歌謡大成』全五巻　一九七八～一九八〇年　角川書店。全巻の編者と刊行年は以下のとおり。）『南島歌謡大成Ⅰ　沖縄篇上』外間守善・玉城政美編　一九八〇年。『南島歌謡大成Ⅱ　沖縄篇下』外間守善・仲程昌徳・比嘉実編　一九七九年。『南島歌謡大成Ⅲ　宮古篇』外間守善・新里幸昭編　一九七八年。『南島歌謡大成Ⅳ　八重山篇』外間守善・宮良安彦　一九七九年。『南島歌謡大成Ⅴ　奄美篇』田畑英勝・亀井勝信・外間守善　一九七九年。
外間守善・新里幸昭『宮古島の神歌』一九七二年　三一書房
外間守善・波照間永吉『定本おもろさうし』二〇〇二年　角川書店
法政大学沖縄久米島調査委員会編『沖縄　久米島』一九八三年　弘文堂
間宮厚司『おもろさうしの言語』二〇〇五年　笠間書院
間宮厚司『沖縄古語の深層―おもろ語の探究』二〇〇八年　森話社
宮良当壮『琉球文学選』一九五八年　謄写版。『宮良当壮全集』第18巻（一九八三年　第一書房）に収録。

【付記】

本稿は二〇一二年八月十・十一日に開催された、琉球大学国際沖縄研究所主催のシンポジウム〝沖縄学を問い直す〟（於：沖縄県立博物館・美術館）での報告をまとめたものでる。シンポジウムでの発表ということもあり、

Hosei University Repository

時間的な制約のためごく荒っぽいとりまとめとなってしまった。戦後から六九年が経っており、「この半世紀」という括りでは現在の研究までを網羅することは当然出来ていない。これについてはいずれ機会を得て、全体をみわたしてみたいと思っている。なお、本稿の性格上、先覚の諸先生方に対する敬称は割愛させていただいたことをおことわり申し上げる。

末筆となり誠に申し訳ありませんが、一言、申上げさせていただきたいと思います。

外間守善先生・武者英二先生・比嘉実先生、いずれも琉球・沖縄文学研究と沖縄建築研究の領域を開拓された、偉大な研究者でした。御三名の先生方には、研究の面のみならず日常の生活の面においてもたくさんのお教えをいただきました。今、先生方の大いなる影響の下に私の研究が展開されていることをしみじみと感じます。

その先生方のご逝去を悼む論文集にこのような雑駁なものしか提出できないことを恥ずかしく思うものですが、今後本稿を基礎にした精密な研究史の作成を目指すことをお約束して、三先生に哀悼の意を表したいと思います。

（沖縄県立芸術大学附属研究所教授）